

2022年12月23日

熊本県知事 蒲島 郁夫 様

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会 共同代表 岐部 明廣
7・4 球磨川流域豪雨被災者・賛同者の会 共同代表 鳥飼 香代子
市花 保
子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会 代表 中島 康

「新たな流水型ダムの事業の方向性・進捗を確認する仕組み」 会議に関する抗議と申入れ

日頃は県民のためご尽力くださることに、敬意を表します。

「新たな流水型ダムの事業の方向性・進捗を確認する仕組み」第1回会議を12月25日に開催することを、県は明らかにしました。報道資料によれば、「命と環境の両立」させるための「新たな流水型ダム」が、安全かつ清流を守るものとして整備が進められているのか、県・流域市町村が流域住民とともに事業の方向性や進捗を確認するために設置した、とされています。

一方で、私たちはこの仕組みおよび会議に対して、表面的な参加と事業進捗のお墨付きを与えるものになるのではないかと、以下の点で疑問を抱いています。

まず、この会議への参加を求め、12月13日に県球磨川流域復興局は手渡す会に対して説明を行いました。その際、流水型ダムで清流保持ができるよう意見を述べることのみが求められ、たとえ流水型ダムが清流を破壊するものであったとしても、流水型ダム反対に関する意見や質問は回答も議論もしない旨が、伝えられました。説明を受け私たちは、県が清流を守ろうとする姿勢はポーズに過ぎない、と受け止めざるを得ません。

次に、蒲島知事が繰り返し「命と環境の両立」を主張することに対して、異論があります。私たちは、命は環境と一体であり、環境との相互作用をもとに存続すると捉えています。ヒトを含む豊かな生態系を育む清流球磨川・川辺川を守ることは、命を守ることと同義です。それゆえ、長年川の傍に暮らし続けてきた生活実感に基づいて、流れ溢れるのが川の本性であり、連続堤防やダムに川を押し込むことは川を破壊するものであると、私たちは受け止めてきました。

さらに、県はこの間、「何が被害を拡大させたのか」という被災者を含む流域住民の疑問に答えることなく、被害拡大メカニズムの解明を怠り従来の治水がもたらした功罪を不問にし、バック・ウォーターのみに収束させるといった都合のいい情報を示すにとどまっています。バック・ウォーターでは説明しきれない現場の状況を投げかけても筋の通った説明はなく、住民が再三求める共同検証も拒否し続けています。流域の被災現場の詳細と被害拡大メカニズムを解明せぬまま事業を進めることに對し、強い怒りを覚えています。

これまでの申入れや要請でも繰り返し述べてきた通り、県が行うべきは、2度にわたる検証委員会で不問にされたままの被害拡大要因群とメカニズムの解明、流域の命を育んできた清流球磨川・川辺川を守り、流域住民の生命をも守る水害対策を、実効性ある住民参加を行いながら、極限まで探求することです。これ以上、事業推進にとって都合の良い情報を垂れ流し流域住民間の分断を進める行為を続けてほしくはありません。被災してもなお「球磨川は悪くない」と語る流域住民の心性に寄り添った県政を、強く求めます。

問合せ先：

手渡す会事務局長 木本雅己